

八 苦勞するは誰が爲め

我等は十金百金の盗人を捕へ來つて、之を責め之を苦しめる。けれども、自分自ら千金萬金にも代へがたき至大の慈恩を、盗んだ者たることを知らない。我等の喫茶喫飯、皆是れ佛恩の御蔭にあらざるはなく、一擧手一投足、悉く大慈の回向にあらざるはない。生れだちはヒイ／＼泣くばかりであった。足はあれども起つこと出來ず、手はあれども取ることできず、口はあれども思ふこと云ふことできず、目はあつても耳はあつても、鼻の穴は開いてゐても、是を活用することさへ出來なかつたのである。それを漸々と育てあげて一人前の者にしたのは、誰の御力ぞ。親の恩、君の恩、人類生物の恩、三寶の恩、我等の身の廻り心の中、一切は恩にあらざといふことなし。此の身此心が既に御恩の結晶でないか。それに、之を以て一切我力ぞと語り、加ふるに之に對する報酬を世に求めつゝありとは何事ぞ。罪の上に罪を犯し、惡の上に惡を塗るものではないか。

恩を盗む者は恩を輕んずる者である。古往今來、何の處にか、窃盜によつて、安固なる家を作つた者があるか。彼等は財を盗むから財を重んぜない。財を重んぜないから永續せぬ。彼等は恩を盗むから、恩を重んぜない。恩を重んぜないから、日々の生命を等閑にし、我に命ぜられたる大任を疎にする。だから何時まで経つても、立派な人間とはなれぬ。

貧乏人で而も酒が大好きで、飲まねば仕事も出來かねるといふ位の者があつた。近頃少しも錢が儲からぬところから、一滴も口に入らず、萎れかへつてゐた。あまりの事に其の妻は見かねて、ふさ／＼とした自分の髪の毛を切つて、かもじ屋に賣り、いくらかの錢に代へ、酒の一二合も買つて來て、「せめてもの憂さ晴し、明日からは精を出して下さい」と、夫に勧めた。すると、

夫はにこく者で久振りに笑顔を見せ、嘗める様に珍重して飲んでゐたが、やがて買ひ調へた譯を聴き、「ほんに女房は持つべきもの、あゝ有難いく」と、如何にも感謝に堪へぬ様な風であつた。そこで、妻は今まで冠つてゐた手拭をとり外して、髪を切つた跡を見せるといふと、亭主は尙更ほくそ笑して、「扱ては、丸坊主になつたといふでもなく、まだ確かに、今一度飲めるだけのものはあるな。これあ、また有難いく」。

どこまで人を酷めるのか。こゝまでに至る女房の苦心は一通りではなかつたらう。にも拘らず、益々増長し付け上つて「今一度飲める、これは有難い」とは何等の云ひ草ぞ。恩を盗むにも、程がある。誰が爲めに瘦たか。誰が爲めに命にもかへる黒髪を賣つたか。賣つたのは女房であるが、賣らしたのは正しく亭主の酒道樂である。親の年寄つたのは誰の御蔭か、親の胸の痛むのは誰の御情か、みんな放蕩息子のためである。

如來をして五劫に思惟させ、永劫に修行さしたのは、誰か。みんな生死の苦界に沈淪する我等衆生である。「夫れ五劫思惟の本願といふも、長載永劫の修行といふも、たゞ我等一切衆生を強ちに、助けたまはんがための方便」からである。如來は因位中に於て一切の群生海を見そなはずに、無始より已來乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心はなく、虛假諂偽にして眞實の心はない。唯罪の上に罪を積み、惡の上に惡を重ねて、苦しみに苦しみ、悶えに悶えてゐるばかりである。そこで如來は、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じつゝ、三業の所修、一念一刹那も清淨ならずといふことなく、眞實ならずといふことはなかつた。如來清淨の眞心を以て、圓融無礙不可思議不可稱不可説の至徳を成就せられたのである。欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸の

法ほふに著ちやくせず、忍力成就にんりきじやうじゆして衆苦しゆくを計はからず、少欲知足せうよくちそくにして染患癡ぜんいぢなく、志願倦しぐわんうむことなく、専もっぱら清白しやうはくの法ほふを求めつゝ、遂つひにこの大願だいぐわんを御成就ごじやうじゆあらせられた。而しかも一々せいくわん誓願あしゆじやうこ爲衆生故みなわれらしゆじやうこ、一々の誓願せいくわんは皆我等衆生みなわれらしゆじやうのためである。喜よろこばれぬのありがた有難まゐいの、参まゐられるの参まゐられぬの、罪つみが重おもいの軽かるいの、親おやと思おもはれるも思おもはれぬもあつたものでない。私わたくしゆゑの御本願ごほんぐわんであつたか、御親切ごしんせつであつたかと、至心信樂ししんしんげうおの己わすれを忘れて、無行不成むぎやうふじやうの願海ぐわんかいに、歸入きにふするより外ほかはない。